寄稿

豊橋市美術博物館友の会創立30周年記念事業

奄美大島田中一村記念美術館を訪ねて

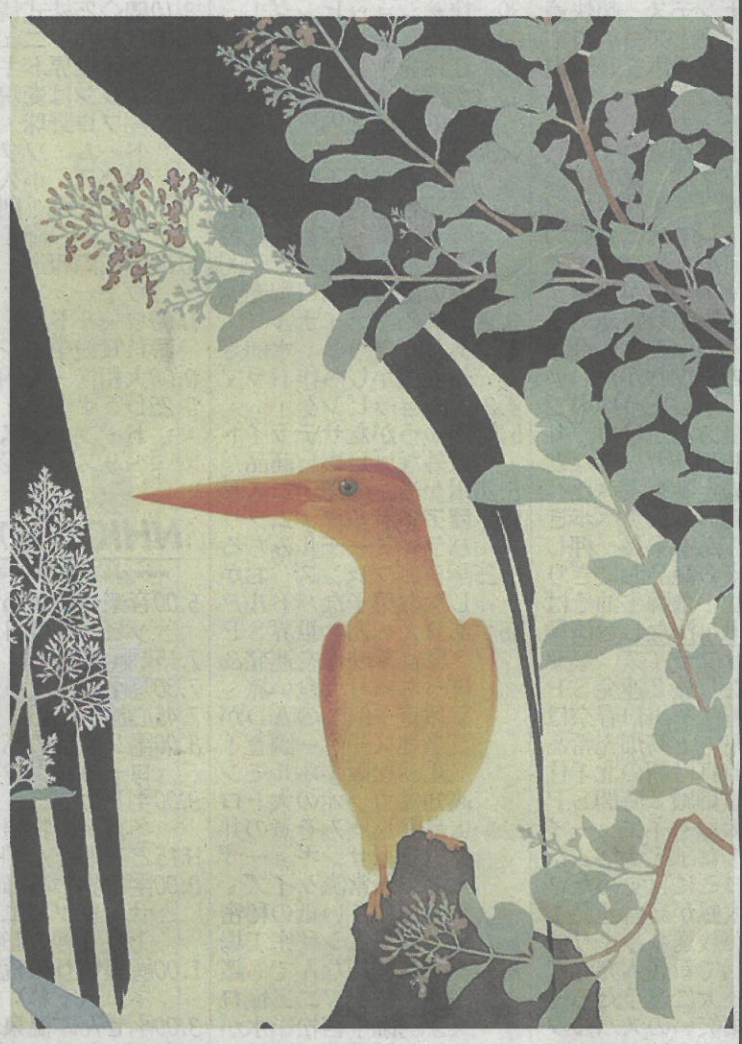
奄美の自然を描いた孤高の画家・田中一村

豊橋市美術博物館友の会創立30周年記念研修で、奄美大島へ5月23日から25日まで3日間の研修旅行に出かけた。

一行40人は、中部国際空港を午前10時40分に出発し、鹿児島で乗り継ぎ、午後3時前に奄美空港に到着した。

田中一村記念美術館は空港から近く、奄美パーク内にあった。館内に入ると、広い中庭に人工池があり、その中に奄美の伝統的な建物である「高床倉庫」をイメージして造られた3棟連なった重厚な建物が水面に反映していて、その陰影の美しさに目を奪われた。同館学芸員による丁寧な説明があり、参加者は一つひとつの作品を食い入るように鑑賞していた。3棟の建物は展示室になっていて、一村の3つの時代「幼年期～青年期」「千葉」そして「奄美」の作品が展示されていた。

奄美大島を訪れた豊橋市美術博物館友の会一行



「ビロウとアカショウビン」＝部分＝（田中一村記念美術館蔵）

一村は絵の才能がありながらも、日本画壇での評価も得られず苦闘していた。1955年、初めて四国・九州などをスケッチ旅行に訪れ南国の自然に魅了された。1958年、50歳で千葉の家を売り払い、生涯の地として奄美に移住。不遇ともいえる生活の中、描き続け、1977年、69歳でひっそりとその生涯を終えた。

館の周辺には、一村の「奄美」時代の絵の世界を亜熱帯の植物で再現した「一村の杜」があり、私たちは奄美で描いた作品を思い浮かべ、アダンの木やビロウの葉に触れながら散策を楽しんだ。

また、パーク内の「奄美の里」では、奄美の自然・歴史・文化を知り、一村の絵をより身近に感じることができた。

2日目は、奄美大島を北から南へバスで移動し、のど自慢にも出場したと言うベテランガイド嬢の案内に耳を傾けながら、自然豊かな島を体感した。

奄美大島の海辺

自然・歴史・文化に触れ一村がより身近に

また、戦跡の一つである旧陸軍の弾薬庫跡を訪れ、歴史の重みをひしひしと感じた。戦争中は、陸海軍の弾薬貯蔵補給基地として使用されていたが、地元の人でも知らなかった。終戦により大量の弾薬が大島海峡（今は養殖の中心）に捨てられて、初めてこの存在を知ったとのこと。鉄骨と厚いコンクリートとさらに厚い銅板で張りめぐらされた洞窟内は暗く、ひんやりとしていた。

潮の満ち時間に合わせてマングローブの森を遊覧船やカヌーでめぐり、川辺の樹木・オヒルギとメヒルギの違いや、枯れ葉となる葉に塩分を残して生き残ってきたことなどを知り、奄美の生態にふれる貴重な体験をした。

流れゆく枯れ葉は美しかった。

自由夕食は、添乗員さんのお勧めで「郷土料理と島唄」の店に多くの人が集まった。奄美の郷土料理を味わいながら、奄美三味線に合わせて参加者全員で島唄を歌い、踊ったことは、友の会のメンバーならではと感心した（皆さん、唄も踊りもお上手！）。

3日目は、島の中心から近い山裾にひっそりとたたずむ一軒家田中一村の終焉（しゅうえん）の家・居住跡を小雨交じりの中訪れた。奄美での一村の生活の苦労を感じ、美術館で見てきた奄美の自然や植物、鳥を鋭い観察眼と画力で描いていた世界に浸った、静かなひとときであった。

学芸員から説明を受ける友の会会員

大島紬村見学で高まる一村の画業と人生への関心

大島紬（つむぎ）村見学では、紬が仕上がるまでの一連の手作業による工程を見ながら、一村に想いがめぐった。一村は生活費を稼ぐため、画材を得るために紬工場で染色工として働き、その中で「奄美」を生み出してきた人生と画業にさらに関心が深まった。

私は、一村の作品「ビロウとアカショウビン」の朱色の鳥は何ものか？ずっと気になっていた。『日本のゴーギャン田中一村伝』（南日本新聞社編）の中で一村は言っていた。「アカショウビンのぶかっこうなほど大きいくちばしの線のバランスがとれず、苦心していたところ、当のアカショウビンが、ふいに飛んできて、庭先のカキの木にとまった。そして私に十分観察し、スケッチする時間を与えてから、おもむろに飛び去った。～略～ 一心になって筆をとるとき、自然はそれにふさわしい姿をみせてくれるのだった」。この奄美大島研修で、あのアカショウビンは、奄美の自然の中で晩年を清貧ながら生き、凛（りん）と立つ孤高の画家一村の自画像だという確信がもて、なぜかほっとした。

曲がりなりにも、絵を描く一人として、画家一村から大切なものを学んだ研修であった。

この素晴らしい研修旅行を計画していただいた豊橋市美術博物館友の会役員の皆さん、一緒にご参加の皆さん、ありがとうございました。

（山口恵里子）

※写真はいずれも豊橋市美術博物館友の会提供